

■ 2015 年春季全国研究発表大会での受賞研究者の紹介

経営情報学会では全国研究発表大会にて、各賞を受賞された研究者の表彰式を行っています。2015 年春季全国研究発表大会でも、3 名の研究者が表彰されました。

最初に表彰されたのは、学生優秀発表賞に選ばれた、東京工業大学社会理工学研究科修士課程に在籍中の猪爪健太氏「IT-CMF を用いた IT 組織の評価—我が国における適用事例—」です。経営情報学会では若手の育成を重視しています。若手の中から優秀な研究者が出ることを期待して、2012 年度春季全国研究発表大会からポスター発表を設置しています。今回は 4 件の発表があり、猪爪さんの報告が満場一致で選ばれました。

さらに、ICIS (International Conference on Information Systems) への投稿 Design of a Resilient Information System for Disaster Response が受理され、発表された University of Agder の櫻井美穂子氏 (受賞時 慶應義塾大学総合政策学部) と慶應義塾大学の國領二郎氏が、本大会で「AIS 関連国際発表奨励賞」を受賞されました。おふたりを代表して、櫻井氏には、ICIS 発表までの道のりと成果について詳述していただきました。国際的なフィールドでの研究活動を目指す学会員の皆さんもぜひ、参考にしてください。

1. 東京工業大学社会理工学研究科修士課程 猪爪健太 (いのづめ けんた) 氏
2. University of Agder 櫻井美穂子 (さくらい みほこ) 氏

フォーラム誌編集委員会

IT-CMF を用いた IT 組織の評価

—我が国における適用事例—

猪爪健太 (いのづめ けんた) 東京工業大学

1. はじめに

この度は、学生優秀発表賞を頂き誠に光栄でございます。本研究にご協力頂いた関係者の方々、また発表の際にご助言や深い議論をして頂きました諸先生および参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

2. 研究概要

IT 組織に対する成熟度を様々な側面から評価できる方法論として、IVI が開発した IT-CMF が挙げられます。IT-CMF は他のフレームワークと比較して、より IT がビジネスに与える影響の大きさを考慮し、ビジネスへの貢献を高める IT 経営管理に焦点を当てています。また、4 つのマクロ活用力、35 の重要活用力、256 の活用力構成ブロックを持つ極めて精緻な体系であると同時に、様々な評価

アプローチが用意されており、評価結果に基づく具体的な改善提案を行うことも可能です (Costello, 2010)。

本研究では、株式会社三技協様に対し、我が国で初めての本格的な IT-CMF 評価を行い、実施過程で生じる問題を明らかにすることで、今後の適用における示唆を与えることを目的としました。

本調査では、初めに自社の立ち位置を知るために用いられるアプローチである全体評価を行い、35 ある重要活用力について評価しました。次に、この結果をもとに対処すべきビジネス 이슈 を決定し、そのビジネス 이슈 を構成する重要活用力に対して深掘り重要活用力評価を行いました。IT-CMF には、組織が次段階の成熟度へ移行するために取り組むべきプラクティス群 (POMs) が用意されており、最後に評価の結果をうけて具体的提言を行いました。

調査で明らかになった問題について、IT-CMFが管理対象としている領域が広いことから、参加者は自身の専門外の分野については回答が難しく、設問内容の説明が多く求められました。よって、特にIT-CMFの適用を行う場合には、当該企業で用いられている用語やシステム名などを用いた具体的な教育や事前の説明を通して、評価の参加者が目的や重要活用力に関する業務や利点をしっかりと理解していることが重要になると考えられます。

3. おわりに

IT-CMFは本研究で示したほかにも、様々な観点から組織の成熟度を評価することができます。本研究を参考に日本でのIT-CMF研究が進み、より戦略的なIT組織経営に少しでも繋がれば幸いです。

参考文献

Costello, T., "A New Management Framework for IT," *IT Professional*, Vol. 12, No. 6, 2010, pp. 61-64.

努力実った ICIS2014

櫻井美穂子（さくらい みほこ）University of Agder

1. 初めての ICIS 発表

2014年12月にニュージーランド・オークランドで開催された第35回ICISで論文発表をして参りました。同時開催された、ICIS博士学生合宿（ドクトラルコンソーシアム）にも参加する機会をいただきましたので、以下、そこに至る経緯、経験をご紹介しますので、以下、そこに至る経緯、経験をご紹介します。

論文投稿にあたり、経営情報学会の奨励金制度は大きなモチベーションになりました。平野前会長はじめ当制度の設立に尽力くださった先生方に、この場をお借りして感謝申し上げます。この会議に参加できたことで、将来につながる大きな価値を得たことは間違いありません。

ICISへの投稿は2回目、2013年のイタリア大会でのrejectを経て今回の採択となりました。

2. ICIS 論文概要

採択論文のテーマは、「災害対応に情報システムをいかに活用するか」というもので、東日本大震災で被災した自治体の事例研究に基づき Resilience 概念を用いた未来の情報システムの設計方法について論じたものです。

従来の情報システム研究が、「災害に強い」=「技術革新により不測の事態を防ぐ」ことに焦点が置か

れていたのに対し、当論文では先行研究及び事例研究から、「災害に強い」=「現場のニーズに即した機能をいち早く獲得する能力」であると定義し、どのような設計思想を持てばこのような能力を獲得できるのか考察しました。

具体的には、災害発生前に遍在性 (Ubiquity) のあるネットワークとデバイス、一貫性 (Unison) あるデータベースを構築・準備し、災害発生後は現場にある最少の資源を用いて汎用性 (Universality) 高いシステムを活用し、唯一性 (Uniqueness) のある識別子によってヒトやモノを認識することが重要となります。これらの要求を満たすシステムとしてスマートフォンの活用に着目し、自治体の災害初動対応に特化したシステムの構築が有用であると論



ICIS2014 での発表の様子

じ、日本の自治体を対象とした実証実験計画があることを紹介したものです。論文投稿時はこの実証実験は実施されておらず、論文で展開した設計図が完全に実証されていたわけではありませんでしたが、それでも採択されたということは、この設計図の可能性を認めていただいたのだと思います。

3. 採択への道

1度目の投稿時、「テーマ、アイデアは面白いが論文の構造、概念構築がダメ」というのが不採択の理由でした。そこで、2013年 ICIS の Workshop で論文発表し、本大会で採択者の発表を時間のある限り聞く、ということをしました。そこでの発見は、どの発表も、問題定義、論点（概念）、メソドロジー、データ、結論がしっかりしている、ということでした。このように書く当たり前のことのように、私のような非ネイティブからすると、これらがきっちり書かれた論文を英語で書くことは相当の努力が必要だと実感しました。博士学生が多く発表していたのも印象的でした。

2度目の投稿時は、Design science 手法を全面的に押し出し、Case study による Information systems design を目的とした論文であることを強調しました。そのうえで、論文がアプローチしたい問題を明確にし、論文の冒頭から結論まで Resilience 概念に基づいて完璧に論じられているように、論文の構造を何度も見直しました。

このように大きな労力をかけて執筆する論文ですので、結果として採択されれば嬉しいことですが、振り返ると、投稿に向けたこの過程が最も勉強になったと思います。この過程で頂戴したレビューによって、論文のレベルが大きく上がったことは間違いありません。

4. ICIS でのネットワーク作り

最後にドクトラルコンソーシアムについても少し言及したいと思います。本大会への投稿過程では、論文の構造、方法論、概念等の構築について勉強になると述べましたが、コンソーシアムでは友達ができます。世界中から博士課程の学生が40名集まってきます（半数以上はアメリカから）。彼らとの交流の中で、アメリカの大学がいかに競争激烈か、なぜ彼らが論文

投稿に命をかけているのか、よくわかりました。そして彼らと同じ土俵で戦っていくことが、日本人にとっていかに難しいことかもよく理解しました。実際、アジアの大学から参加していたのは私一人だけでした。

ドクトラルコンソーシアム参加の際に提出するのは研究計画書ですので、博士課程の学生には大変勉強になります。第一線で活躍する先生方にメンターになっていただくので、ネットワーク作りにもなります。博士課程の方には、ぜひ ICIS、ドクトラルコンソーシアムへの投稿をお勧めしたいと思います。結果に関わらず、経験を積み重ねることが、レベルの向上につながると思います。

5. 今後に向けて

日本で培ってきた経験や、論文アウトプットが評価され、この9月からノルウェーの大学に就職しました（日本では研究員として慶應義塾大学に籍を残しています）。引き続きヨーロッパの自治体を舞台に、Resilience 概念に基づいた情報システムデザインについて研究・実証を行っていく予定です。そこの研究を将来日本社会に還元できるようにしたいです。

これまでには日本とアメリカで、様々な先生方にご指導いただきました。今後研究者として立ち上げるため、更なるレベルアップを目指し、ノルウェーでも精進したいと思います。



左より國領氏、櫻井氏、平野学会長（当時）